

刺熱篇第三十二

肝の熱病は左に小便壅し。腹滿み多く臥し身熱す。熱争へば則ち狂言し驚くに及ぶ。脊骨滿つる病み。手足躁しく安臥するを得ず。庚辛に甚しく甲にて大汗し。氣逆するは則ち庚辛に死す。足の厥陰少陽と刺せ。其の逆するは則ち頭痛みと鼻息と。脈引くを逆と衛く。

心の熱病は左が樂し。数日して乃ち熱す。熱争へば則ち卒に心痛み。短内し。善く嘔し。頭痛しと面赤く。汗するを無し。左が甚しく。丙丁にて汗す。氣逆するは則ち左が死す。手の少陰太陽と刺せ。

三十二

脾の熱病は左が頭重く煩(熱)病み。煩心し。煩(熱)言く嘔てと欲しと身熱す。熱争へば則ち腰痛み。後仰を用う可なり。腹滿し。泄しと両頷痛み。甲にて甚しく。戊己にて汗す。及遺するは則ち甲にて死す。左の少陰陽明と刺せ。

肺の熱病は左が洒淅然とと厥し。毫毛起つ。惡風し。寒之舌上重しと身熱す。熱争へば則ち喘欬し。病みは胸脅(おほ)背に走り。大息するを得ず。頭痛に堪へず。汗出て寒也。丙丁に甚しく。庚辛にて汗す。氣逆するは則ち丙丁にて死す。手の少陰陽明と刺せ。血を出す。三人互のわかれは。まうとこに己也。

胃の熱病は及ぶ喉痛外、喉痰、苦、渴と数日間は
飲食、身熱あり。熱辛（少則）項痛が強く、喉塞之
且つ痰と足下熱。言ふと成す。其の逆は少則項
痛あり。胃（胃之）澹澹なり。已成に甚くと、左尖に大穴に
汗す。及逆すれば則ち已成に成す。足の少陰太陽を刺せ。
諸汗はこう勝所に汗りて日に日に汗出づるなり。

四

肝の熱病は左頰及ぶ赤く、心の熱病は顔及ぶ赤し。脾の
熱病は鼻及ぶ赤く、肺の熱病は右頰及ぶ赤く、腎の熱病は
頤^か及ぶ赤し。病未だ發せざるを雖も、赤色見はるるは之を
刺せ。名付けて木病と謂ふと曰ふ。

三十一一三

四

熱病の却所從り起る者は、期に汗りて已中。其の刺つ及ぶる
處は、三周と已中。重ぬて逆すれば則ち成す。諸汗の當に汗す
心と者は、その發所の日に汗りて汗大いに出づる也。諸汗の
熱病を治すには、以て之に寒水を飲ませ、及んぶと刺せ。必ず
之に寒水を飲ませ、居る處に止め、身寒し而して止む也。

四

熱病、及ぶ胸脅痛外、手足躁なるは足の少陽を刺し、
足の少陰を補へ。病甚しと者は、五十九刺と爲せ。熱病の千
臂の痛みに始まる者は、手の陽明太陽を刺し、而して汗出
こ止む。熱病の頭首に始まる者は、頭の太陽を刺し、而して汗
出こ止む。熱病の足脛に始まる者は、足の陽明を刺し、而して汗

出之止ぬ。熱病の身重く骨痛が耳聾し好く瞑するは足の少陰を利す。病甚しければ五十九利を爲せ。熱病の及ぶ眩暈目

四

一と熱し。骨胸滿つるは足の少陰少陽を利せ。太陽脈の色。觀に榮するは骨熱病なり。榮が未だ大なる^(大)に^(大)至らば。今日に汗を得んすの。と曰ふ。時を待ちて自汗^(自)已中。厥陰脈と平ひ^(平)比はる者は。其の熱^(熱)内^(内)の^(内)に^(内)連^(連)は^(連)ぬ^(ぬ)少陽の脈の色^(色)に^(色)榮^(榮)する^(榮)は^(榮)邪^(邪)熱^(熱)病^(病)なり。榮が未だ大せざらば。今日に汗を得んとす。と曰ふ。時を待ちて自汗已中。少陰脈と平ひ^(平)比はる者は。死期三日を過ぎず。

四

熱病の榮が。三椎の下の間は胸中の熱を主ぬ四椎の下の間は

三十二、一五

二椎の熱を主ぬ五椎の下の間は肝熱を主ぬ六椎の下の間は脾熱を主ぬ七椎の下の間は腎熱を主ぬ榮^(榮)は^(榮)頭^(頭)上^(上)三椎の^(三)間^(間)に^(間)在^(在)る^(在)也。

四

頰の下。頰に汗するは。大便を爲す。下の牙平は脹滿を爲す。頰後は脊骨痛と爲す。頰上は兩上なり。